

こんな子にどうかかわるか

言われたことしかしない子

上越教育大学大学院准教授

はやかわ
ひろたか
早川 裕隆

幼児期からの変化

宮川らの研究(1)によれば、幼児のほとんどが、家庭で少なくとも一つ以上のお手伝いをしている。また、学校でも、特に低学年では、役割を依頼されることを待ち望んでいる子どもが多い。この段階では、認められたい相手から頼まれたことを、人を押しのけてでも、果たすことで自分(だけ)を認めてもらうことが期待されていると考えられる。そのため、年齢とともに、他者への配慮といった能力が発達していくにつれて、その行動は形を変えていく。しかし、一方で、表題のような子どもたちへの変化は、他者への配慮といった能力の発達というより、かかわりを回避しようとする消極的・否定的

な姿勢が感じられる。

自発性の成長を妨げるもの

河地の調査研究(2)は、日本の中学生(一五歳)の子どもたちの自尊心・自信 (self-esteem) に関する測定テストの結果が、他国に比べて、「非常に低い値」を示していることを報告し、「日本の子どもたちの多くが自分に満足せず、誇れず、価値のある人間であると思えないとの自己評価を下している」と指摘した。

また、表1や表2から、子どもたちには互いを信用できない緊張感があり、友だち関係がこわれることや悪口を言われることの不安から、目立たないようにしている様子がうかがえる。このように、自尊心の低さは、目

表1 「低年齢少年の価値観等に関する調査」(総務庁,2000⁽³⁾より)

<小4～中3 2,243人> ○人といると疲れる…19.9% ○人は信用できないと思う…23.4% ○自分が満足していれば、人が何を言おうと気にしない…33.9% ○小さなことでもイライラする…35.4% ○腹が立つとつい手を出してしまう…29.6% ○自分のやったことが良かったか、悪かったか、あまり考えない…33.5%

表2 「学校での不安と気遣い」(ベネッセ教育研究所,1998⁽⁴⁾より)

<中1～中3 1,235名> ○友だち関係がこわれないかと不安になる…40% ○仲良しの友だちでも、自分の悪口を言っているかと気になる…39.3% ○仲のよい友だちでも、悩みまで話せない…34.5% ○クラスの中では目立たないようにしている…31.8% ○友だちからバカにされていると思う…28.1%

立つことや、失敗して非難されることなどの「リスク」をおかしてまで、言われたこと以外のことを自主的に行うことを否定させるばかりか、自主的行動を期待される関係を回避しようとすらさせているのではないかと思えるのである。

ところで、河地は先の研究で、日本の子どもたちは、

親からほめられていると感じているが、一方で、他国の同年代の子どもたちと比べると、「悩みを理解されていない」「落ち込んでるとき声をかけてもらえない」など、「ほめてもらえるだけで、あとは放っておかれている」と感じているという「深刻な問題」があり、この状態を「親が子どもの心の問題に向き合っていないことを示唆しているのではないだろうか」と考察している。このことを「思春期特有のもの」ととらえるのではなく、児童期から抱えていた思いを、言語化できる時期になって表現したにすぎないと考えたとすると、「言われたこととしかしない」、すなわち、無関心を「装う」のは、認められたい大人から「関心に向けてもらえない」と失望する深刻な状態から自分を守るすべとして学習した役割であると言えないだろうか。だとすると、「言われたこととしかしない子」だけでなく、その周囲の子たちにも、これ以上関係に失望させるのではなく、相互に自尊感情を高め合うことのできるかわりを支援することが、喫緊の課題であると考ええる。

感情の共有の体験が自尊感情を育てる

自尊感情という点、他者との比較により、自分に

(も) 優れているところがあると実感し、自信を持つことを連想しやすい。たとえば、漢字は苦手だけれどスタイルは良いとか、算数は苦手だけれどサッカーが得意、といったたぐいである。しかし、このような自尊感情は、いつも他者に負けたり、失敗したり、しかられたりしないように必死に「がんばり続ける」ことを強いられるので、子どもたちは、崩壊への不安や緊張を抱え続けざるを得ないといえる。このような、いつ崩れるかわからない不安定な自信によって形成される自尊感情の「領域」を、近藤(3)は「社会的自尊感情」(Social Self Esteem)と定義し、これとは別の領域、すなわち、絶対的無条件な自己の受け入れによって形成される自尊感情の「領域」を、「基本的自尊感情」(Basic Self Esteem)と定義している。近藤によれば、この領域の感情は、他者との感情交流により「感情が共有される体験を通じて、自分の感じ方はこれでいいんだ、自分はこれでいいんだ、という確認を繰り返す」ことで形成され、一度積み上げられ育まれた基本的自尊感情は、「自分自身を支える心の強固な基礎となつて、簡単に崩れたら消え去ったりすることはない」。先の河地の調査に見られた「ほめてもらえただけで、あとは放っておかれて

いる」と感じている子どもたちは、能力の優位性を「ほめる」(社会的自尊感情) だけではなく、「基本的自尊感情」を育成する感情の共有を希求していると考えるとする、まず何より、教師や保護者が、子どもたちとの(二者)関係の中で、子どもたちの感情、とくに感動を共有しながら増幅するようにし、さらに教師は、学級や学校が、子どもたち同士の感動や感情の共有の場になるようにしていくことが肝要だといえる。子どもたちには、自分たちの感動や感情を、我がことのように感動し共有してくれる人との出会いが必須なのである。

聴く態度を身につける

ここから、(基本的)自尊感情を育てる、より具体的な支援の内容について論じる。

一つは、聴く態度の育成である。相手の話に持続的な注意を向けることができれば、社会的相互作用は促進されると考えられる。そのためには、まず教師や保護者が、子どもとの間に、子どもが「何でも聴いてもらえる」安心感を感じる関係、すなわち、「弱音」をはける関係を築くことが肝要である。その中で、親や教師が、子どもの話にうなずいたり、相づちを入れたり、質問し

たりするなどの聴き方のスキルを取り入れたモデルを示すことで、子どもたちは自らコミュニケーション・スキルを身につけ、良い「聴き手」に育っていくのである。

自己主張のスキルを身につける

子どもたちが、相手との関係におびえている実態については、前述のとおりである。その結果、自分を抑えて相手の言いなりになることに終始したり（非主張的言動）、逆に一方的に自分の主張を押し通そうとしたりする行動（攻撃的言動）が生起するのではないだろうか。

とはいっても、これ以外の方法が自然と身につくことは期待しづらい。そのため、相手のことにも配慮しながら、自分の考えを主張する姿勢や方法（アサーティブな言動）を、意識的・意図的に支援（アサーション・トレーニング）する必要がある。

まず教師や保護者が、日常生活の子どもたちとの会話の中で、アサーティブな言動のモデルを示して、子どもたちが抵抗なく受け容れる経験と、受け容れられる経験を持てるようにする。

さらに、家庭では、きょうだいの対立や対人関係の困難さが話題になったときなどに、どのような伝え方をす

ると相手に主張が伝わるのか、親子で一緒に考えてみる。その際、アサーティブな言動と、先の二つの言動とをシミュレーションしながら、そのよさについて実感できるようにする。

学級では、たとえばトラブルなど、関係性の問題を考えたときに、ロール・プレイングを使って場面を再現することで相互の感情を明確にし、さらに新たな役割の追求でアサーティブな関係を創造することで、そのよさを実感していく繰り返しを丁寧に行うのである。

自己決定の場と自己責任を支援する

いわゆる指示待ち人間にならないように、たとえば、係活動や当番の活動、家庭での手伝いの場面などで、どうしたら良いのか、どうしたいのか、どうすべきなのかなど、内容や方法を考えさせ、「できる」ように支援するとともに、その結果については、自己責任の感覚を学べるようにする。そのために、成功したときだけでなく、失敗したときの感情の共有も大切にし、原因の考察や、時には代案の提示をしながら、子どもが納得して次の活動への意欲を持てるようにする。

道德の時間を柱に「心を育てる」場の実現を

以上述べてきたように、家庭や学校での自尊感情の育成は、子どもの自主的活動を実現可能とするベースとなる。ここではさらに、行動(道德的実践)の推進力となる道德性の育成、すなわち、「心を育てる」道德の授業について述べていく。

筆者は、現在の職の前に、小学校教員として、役割演技による道德の授業を実践してきた(詳細は文献⑥を参照)。役割演技による道德の授業では、サポートタイプな良き聴き手の中で、道德的価値に関する課題が焦点化され、さらに、演じられる関係性の中で、子どもたちに新たな役割(自分のあり方)が、感動として実感的に理解される。また筆者の研究⑦で、役割演技による道德の授業は、思いやり行動と関連のある、共感性や役割取得能力、向社会的道德判断の育成に、有意な効果があることも認められている。

これらの支援(かかわり)や授業の継続とその関連が、子どもたちの自尊感情の伸長による自主性や創造性の高まりをもたらし、さらに日常生活での人間関係を豊かにしていこうとする意欲や態度を身につけ、「言われ

なくても」「進んで行く」子を育てていくと考える次第である。

【引用・参考文献】

- (1) 宮川三平、所 敏治、佐伯節子「幼児の生活習慣と健康について 第2報——お手伝いと心の健康」『児童学研究』第一号、聖徳大学児童学研究、二〇〇九
- (2) 河地和子『自信力はどう育つか』朝日新聞社、二〇〇三
- (3) 総務庁「低年齢少年の価値観等に関する調査」二〇〇〇
- (4) ベネッセ教育研究所(現在はベネッセ教育開発センター)『モノグラフ・中学生の世界』六一、一九九八
- (5) 近藤 卓「いのちの尊さを育む教育」『教育と医学』第五七巻第三号 慶應義塾大学出版会、二〇〇九
- (6) 早川裕隆『役割演技を道德授業に』明治図書、二〇〇四
- (7) 早川裕隆「ロール・プレイングによる道德の授業の実証的研究」上越教育大学院修士論文(未公刊)、一九九八